研究余滴

まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（三）

影山輝國

前回は『経籍訪古志』（解題叢書本）に著録される五種の旧鈔本『論語義疏』の中で、行方不明の「求古楼蔵本」と「容安書院蔵本」について述べた。今回は「求古楼蔵本」に関する補遺である。私は『経籍訪古志』の記述から「求古楼蔵本」は一本だけだと思っていた。豈図らんや、狩谷棭斎は三本ないし四本の『論語義疏』鈔本を蔵していたのである。

西尾市岩瀬文庫に渋江抽斎の編に係る『卿雲輪囷附録』と題する漢籍善本目録の写本がある。(一)

図版削除

写真一　西尾市岩瀬文庫蔵『卿雲輪囷附録』

これは天保十一年（一八四〇）十月二十七日に椿庭山田業広（一八〇八―一八八一）が抽斎の自筆稿本を手写したものである。写真一はそのうちの『論語義疏』に関する部分である。

皇侃義疏
古抄本　柳原書屋蔵
古抄本　求古楼蔵
古抄本　同　上
古抄本　同　上
古抄本　足利学蔵
古抄零本　村山敬応求誨堂蔵
古抄零本　岡西徳瑛　蔵

とある。初めの「柳原書屋蔵」とあるのは渋江抽斎（一八〇五―一八五八）の容安書院蔵本のことである。その次に「求古楼蔵」とある三本が狩谷棭斎の蔵本である。ちなみに第五本は足利学校の蔵本で、足利学校遺蹟図書館に現存している。第六、第七本は零本ではあるが、村山敬応の求誨堂蔵本、岡西徳瑛蔵本があったことは初めて知った。村上敬応の求誨堂については未調査である。岡西徳瑛とは森鷗外の『伊沢蘭軒』にたびたび登場する蘭軒の門人で、いわゆる「蘭門の五哲」の一人、字は君瑤、通称は玄亭という人である。(二)

柏崎順子氏にも指摘があるが、静嘉堂文庫に『卿雲輪困附録』と内容を同じくする況斎岡本保孝（一七九七―一八七八）自筆本の『経籍攷』がある。(三) また、これを清書したものが国立国会図書館所蔵の『経籍攷』（『況斎叢書』二）である。心覚えのためにどちらも『論語義疏』の部分の写真を載せておく。欄外の書き込みが、本文中に組み込まれて清書されたことがわかり興味深い。

写真二　静嘉堂文庫蔵『経籍攷』

図版削除

写真三　国立国会図書館蔵『経籍攷』

図版削除

「永正刊本　篁墩吉学生蔵見太田氏九経談五」と「又　九折堂蔵　九行行廿字蓋天正以前抄本」とあるのが岡本況斎の増補である。しかし『論語義疏』に永正年間（一五〇四―一五二一）の刊本などあろうはずがない。錦城太田元貞（一七六五―一八二五）の『九経談』巻五を見ると「予昔於亡友篁墩吉学生所見其所弃永正刊本集解」とあり、刊本『論語集解』の誤りであることが判明する。また九折堂本は山田業広所蔵本であり、楊守敬に購得されて、今は台湾故宮博物院図書文献処に蔵される。

西尾市岩瀬文庫には狩谷棭斎の求古楼における展観目録といえる『卿雲輪困録』四冊が所蔵されている。その第四冊は、柏軒伊沢信重（一八一〇―一八六五）手写本を、養竹森立之（一八〇七―一八八五）の孫、幸子（約之の女、鑛のことか）が手写したもので、「求古楼所蔵漢籍善本目録不完本[四]」と呼び得るものである。その『論語義疏』に関する部分が写真四である。

写真四　西尾市岩瀬文庫蔵『卿雲輪囷録』第四冊

図版削除

論語義疏十巻十冊古抄本
白紙裱紙九行廿字

同五冊古抄本
八行廿字「大通」ノ朱印アリ

同五冊古抄本
十行十八字表紙ニ「長氏」ノ印 中ニ
「長直之印」「千秋閣」ノ朱印アリ

論語義疏十巻古抄本
八行廿字往往圖アリ朱批句投アリ

はじめの三本が『卿雲輪囷附録』に見える求古楼蔵の三本に相当するであろう。最後の一本は求古楼蔵の三本の後、別の書物の記述があった後で記載されている、後になって求古楼に入ったものであろうか。

最初の一本はこれだけでは情報が不足している。現存する鈔本(五)のなかにも十巻十冊のものは十本ほどあるし、その半数は九行廿字である。白紙裱紙は現存の鈔本中に見当たらないが、裱紙は付け替えることが可能であるので、この本が今残る鈔本のいずれかに該当するものか否かは全く不明である。

第二の古抄本は「大通」の印記がある。現存鈔本では東京大学総合図書館所蔵本にも同形の「大通」（朱文）の印記がある。ただ東大本は五冊という点では同じであるが、九行廿字であるので、八行廿字である求古楼本とは異なっ

ている。また東大本には「宗密」（白文）という印も押されている。「大通」「宗密」は川瀬一馬氏が、慶長頃から江戸初期にかけての蔵書印記として挙げられ、「宗密は妙心寺住、丸形」と解説する。[六]今はそれ以上のことはわからない。

第三の十行十八字本は、現存のものでは市島酒造所蔵本のみが同じく十行十八字であるが、印記からいって別本であることはまちがいない。長直之は川口良玄著『安産要訣』に序文を書いており、「寛政戊午孟春　藝州　喜庵　長直之撰」と署名があるが、どのような人物か、詳しいことは不明である。

第四の十巻本は何冊あるのか書かれていない。現存の鈔本で全巻通して八行廿字のものは五本ある。[七]そのうち「往往圖アリ」となると、東洋文庫所蔵の上原本十巻十冊が当てはまる。上原本は第一巻末に「一歩之圖」「一畝之圖」「一夫之圖」「屋圖」「一井之圖」「一通之圖」「一乗之圖」「千乗之圖」「一乗圖」「七廟之圖」「八木崗能化七廟之圖」「商七廟之圖」「北極辰星之圖」その他を附している。上原本には朱引、朱点、墨返点、墨送仮名、上欄に墨筆の書入れがあるが、これが「朱批句投アリ」に当たるか否かは若干疑問が残る。したがってこの古抄本は、上原本と同系統のものである可能性はあるが、上原本そのものであるとは断定しがたいであろう。

これら四本の求古楼蔵本の内、いずれがもと吉田篁墩の蔵書だったのかは明らかでない。

以上、今回は狩谷棭斎の求古楼には三本ないし四本の鈔本があったこと、また別に、零本ではあるが村山敬応の求誨堂蔵本と岡西徳瑛蔵本とがあったことが判明した。

（待続）

注

（一）『卿雲輪囷附録』および後に言及する『卿雲輪囷録』については、柏崎順子氏に「渋江抽斎編『卿雲輪囷附録』」（一橋大学『言語文化』第三六巻　一九九九年一二月）と題する詳しい解説がある。

（二）鷗外『伊沢蘭軒』の「その百六十六」「その百九十四」等々に見える。

（三）柏崎氏は注（一）に引く論文で、「『経籍攷』は『卿雲輪囷附録』の一本を藍本とする転写本に保孝の補訂が加えられた本だったのである。」という。

（四）柏崎氏による命名。

（五）拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（一）（『実践国文学』第七十八号　二〇一〇年一〇月）を参照されたい。

（六）川瀬一馬「日本書誌学研究序説　十八　蔵書印に関する問題」（『日本書誌学之研究』六九頁　大日本雄弁会講談

社　一九四三年六月）

（七）一部分が八行廿字の鈔本が三本あるが、そのうち大東急記念文庫蔵の「久原本」は首一巻のみ八行廿字で、各種の図が附せられている。ただし、第一巻から第十巻（第四巻は欠）の九冊は九行廿字である。

写真掲載に当たっては、西尾市岩瀬文庫、静嘉堂文庫、国立国会図書館の許可を忝くした。特記して感謝の意を表す。

（かげやま　てるくに・実践女子大学教授）